

スポーツボランティアサミット2016 報告書

リオ 2016 の経験に学ぶ -スポーツボランティアができること-



開催日: 2016年12月17日(土)

開催場所: 東京富士大学 メディアホール
(東京都新宿区高田馬場3-8-1)

目次

1. スポーツボランティアサミット 2016 概要	1
2. プログラム内容	
(1) 挨拶	2
(2) 基調講演 「スポーツボランティアの可能性」	3
(3) パネルディスカッション 「リオ 2016 の経験に学ぶ ～国際大会でのボランティアの在り方を考える」	
① パネリストからの活動報告	6
② ディスカッション	10
③ 会場からの質問	12
④ まとめ	13
(4) 大会概要紹介 ラグビーワールドカップ 2019	14
(5) 総括	18

1. スポーツボランティアサミット 2016 概要

主 催： 特定非営利活動法人日本スポーツボランティアネットワーク
共 催： 東京富士大学
開 催 日： 2016年12月17日(土) 13:30～16:30
テ ー マ： リオ 2016 の経験に学ぶ ～スポーツボランティアができること～
会 場： 東京富士大学 メディアホール(東京都新宿区高田馬場3-8-1)

プログラム：

13:30～ 挨拶

小野 清子 (日本スポーツボランティアネットワーク 理事長)

13:40～

基調講演

「スポーツボランティアの可能性」

朝日 健太郎氏(参議院議員)

14:10～

パネルディスカッション

「リオ 2016 の経験に学ぶ ～国際大会でのボランティアの在り方を考える」

○パネリスト

田口 亜希 氏(パラリンピアン、Rio2016 パラリンピック視察)

竹澤 正剛 氏(JSVN 講師、Rio2016 オリンピックボランティア)

星野 恭子 氏(JSVN 特別講師、Rio2016 パラリンピック取材)

○コーディネーター

佐野 慎輔 氏(産経新聞 特別記者兼論説委員)

〈休憩〉

15:40～

大会概要紹介

陸川 克己 氏((公財)ラグビーワールドカップ 2019 組織委員会総務・人事部長)

16:10～

総括

二宮 雅也 氏(日本スポーツボランティアネットワーク 理事)



2. プログラム内容

(1) 挨拶

小野 清子

(日本スポーツボランティアネットワーク 理事長)

本日は、スポーツボランティアサミット 2016 に多くの皆様のご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

大変な盛り上がりを見せましたリオ 2016 が終わり、次はいよいよ東京です。東京 2020 の開催について、レガシーがなにかと話題になりますが、ボランティアは間違いなくソフト面でのレガシーになり得ると考えております。



日本スポーツボランティアネットワークは、質の高いボランティアを養成すべく、各種研修会を開催しておりますが、東京 2020 の開催決定後、大学や企業、行政などからの多くの問い合わせをいただき、また講演依頼も急増しており、スポーツボランティアに対する社会認識は大きな広がりを見せたと実感しております。しかしながら、スポーツボランティアが文化として定着したかと問われますと、まだまだ道半ばと認めざるを得ません。

今回のテーマは「リオ 2016 の経験に学ぶ スポーツボランティアができること」です。本日はお忙しい中、参議院議員、朝日健太郎様に基調講演をお願いしております。リオ 2016 を視察されたご感想や、これまでのビーチバレー選手としてのご経験などをお話しいただきます。またパネルディスカッションや大会概要説明でご登壇いただく方々にもお越しいただいております。改めてこの場をお借りして御礼申し上げますとともに、ご参加の皆様方には、本日のサミットを通じて、『スポーツボランティアができること』を一緒にお考えいただければ幸いです。

日本スポーツボランティアネットワークは、様々な情報提供を行っております。どうぞ、これらの機会を存分に活用し、皆様のボランティア活動に役立ててください。

(2) 基調講演(要旨)

「スポーツボランティアの可能性」

朝日 健太郎 氏 (参議院議員)

ご紹介いただきました朝日健太郎です。本日は、スポーツボランティアサミットにお招きいただき、ありがとうございます。空席もなく、ボランティアそしてスポーツへの皆様の関心が深いことを実感しております。



今日は、まず、アスリートとして2度オリンピックに出場した私自身の経験について、ボランティアというよりもアスリートを少し理解していただく観点からお話をさせていただければと考えております。二つ目に、ボランティアスタッフの皆さんとの思い出や経験などについて、そして三つ目に、スポーツボランティアをはじめ日本社会がこれからどのようなようになってほしいかの個人的な思いについてお話ができればと思います。

私は、体格に恵まれ、バレーボールとビーチバレーを延べ25年間、学校スポーツから始まりプロとしてもやっておりました。小学校時代はさほど運動は好きではなく、サッカーをやりましたが、ボールが痛いし、泥だらけになるので辞めました。バレーボールを始めたきっかけは、髪の毛を坊主にしなくてよかったということでした。子供の時から高い理想を持って日の丸を背負っているアスリートも沢山いて、ナショナルトレーニングセンターに小学校から生活の拠点を置いてオリンピック選手たちと一緒に練習をする子供もいますが、最初からオリンピックやメダルを目指してスポーツを始める子供は少ないと思います。私が25年間続けてこられた一番の理由は、あまり自分に負荷をかけなかったこと、そして、すぐあきらめることはしませんでした。が、やっている事が自分に合わないと思ったら、迷わず方向転換をしたことです。6人制のバレーボールで若手の成長株として期待されましたが、何か違うと思い、誰も経験していないビーチバレーに転向した結果、自分に向いていると感じました。自分に合うスポーツに出会った結果、選手を長く続けることができ、オリンピックにも行くことができました。子供にとって大事なのは、自分は何のスポーツがやりたいのか、何をやれば気持ちよくできるのか、ということを手づかみに考えさせることです。

まだ議員としての日は浅いのですが、今年の7月から永田町に通うようになって驚くのは、スポーツをテーマとした委員会の数や法改正・税金などの話が多いことで、ふだんニュースで流れる情報量の数倍は議論されています。スポーツボランティアについても、相当議論が行われていると言えます。



ボランティアスタッフの方々との最初の思い出は、北京オリンピックで、びっくりしたのは若い学生ボランティアスタッフの有能さでした。中国全土から来ていた大学生の彼らは、3~4つの言葉ができるのが当たり前で、国際的な評価を受けるために中国がそれだけ2008年の北京オリンピックにかけていたということ

です。以前に比べて街中は清潔になり、選手村では、若いボランティアの素晴らしいホスピタリティを感じました。中国は、オリンピックによって対外的なイメージを変えることに成功し、国際社会の仲間入りを果たしたと感じました。

ロンドンオリンピックでは、ビーチバレーでチームの世話をしてくれた80才の白髪のおばあさんボランティアのことが思い出されます。水やタオルを持って来てくれたり、試合時間を教えてくれたりして、こんなおばあさんで大丈夫だろうかと疑ってしまったことを後で反省しました。隣のチームのボランティアもご高齢の男性でした。ロンドンオリンピックは多様性をテーマとし、年齢その他の障壁をすべてとり払って、いろいろな人がかかわれるようにしたことで成功しました。そのような中、高齢のボランティアと触れ合うことができたのは貴重な経験でした。

視察で行ったリオオリンピックは、ボランティアの横に銃を持つ警備の人が立っていたりして、今までのオリンピックとはイメージが違いました。ビーチバレーで半年ほどブラジルに留学した経験があり、ブラジル人の事は多少わかっていただけに、本当にオリンピックができるのか心配でしたが、何とかなっていました。笑顔でハイと言って迎えてくれるボランティアスタッフのあの明るさは、日本でも浸透してほしいと思います。今後、ラグビーW杯、オリンピック・パラリンピック、ワールドゲームズなどいろいろな大会があり、海外から沢山の選手が来ますが、これ以外にも国内の地域の大会など、様々な形でスポーツボランティアの活躍の場があります。各開催地のイメージを形作り、その国のプレゼンスを上げることがボランティアスタッフの役割として挙げられます。自分の記録よりも、ボランティアから受ける印象の方が私の中でも記憶に残っています。自分が接したボランティアを通じて中国に対する見方が変わり、イギリスに対する理解を深め、知っていたつもりのブラジルについても、ブラジルの国民性をより深く感じることができました。スポーツボランティアは、その国を理解してもらう

大事な役割も担っていると思います。

次に、スポーツ大会から少し視点を変えて、社会的な課題について目を向けると、今、アスリートが学校教育現場にどのように介入できるかというテーマに取り組んでおり、特に学校の現場には、部活問題があります。部活に興味があつて教員になつた方は、授業のカリキュラムその他をこなした上で、部活動を指導しておられますが、その一方で、そのスポーツの経験がなく、ルールもよくわからないのに部活の指導を任されるケースもあるため、部活指導を外部の方に移管して行こうと取り組んでいます。キーワードは“チーム学校”で、まず学校があり、学校が地域の中心だととらえます。そこに生徒がいて、地域の人達がそこにどんどんかかわっていき、放課後のサポートスタッフやそこで指導する人に国家資格を付与するという議論が行われています。今日ご来場の皆さんの主旨がスポーツボランティアなので、スポーツ競技大会にかかわりたいと考えている方が多いとは思いますが、学校でもボランティアスタッフのニーズがあるということもちょっと覚えておいてください。スポーツでかかわるのもいいですし、子供たちの教育をサポートする事も考えていただきたいです。

今、IOCが運営するオリンピックはどこに向かっているかという、それは若者です。オリンピックには、教育とか世界平和とか壮大なビジョンがありますが、スポーツで頑張り、未来に夢を持つ若者のためにオリンピックはあるのであり、若者がいかに未来に輝けるかというテーマのために彼らを支える側との循環が生まれるのです。今日は、パラリンピックの田口さんもいらっしゃいますし、いろいろなジャンルの方々がおいでです。スポーツの現場でさまざまなかわり方がありますが、根っこのどこかに「若者のために」という考えを持っていただきたいと考えています。これからも海外選手が来る地域の大会がいろいろとあると思いますが、その地域のプレゼンスをあげるのにボランティアが果たす役割は大きいです。若者たちのためにもこれからのスポーツを支えていくという認識をもっていただくと、今後の活動の糧になっていくと思います。



(3) パネルディスカッション(要旨)

「リオ 2016 の経験に学ぶ ～国際大会でのボランティアの在り方を考える」

コーディネーター 佐野 慎輔 氏

(産経新聞 特別記者兼論説委員)

本日は沢山の皆様にお集まり頂きありがとうございます。本日来られている方は、殆どが何らかのボランティア経験がある方ばかりとの事ですが、学生の皆さん含め、ボランティアの経験がない方も、東京 2020 大会までの間に様々なことを学び、吸収して頂ければと思います。



昨日、小池都知事の決定によりバレーボール競技会場も有明に決まって、東京五輪の殆どの競技会場が固まり、いよいよ実務的な話へと移っていきます。来年の夏には、一部のボランティアの募集が始まります。本日お集まりの御三方—田口さんは元パラリンピアンとして様々な立場からリオデジャネイロ・パラリンピックを視察され、竹澤さんは実際にボランティアを行い、星野さんは取材をされています—にそれぞれ別の角度からボランティアをどのようにご覧になっていたかをお聞きする事で、皆様の糧にしていきたいと思えます。

① パネリストからの活動報告

田口 亜希 氏

(パラリンピアン、Rio2016 パラリンピック視察)

パラリンピアンとしてアテネ・北京・ロンドンへ行った他、ワールドカップやアジア大会など様々な国際大会に出場しました。どこにおいても、私たちアスリートにとってスポーツボランティアはなくてはならない存在で、ボランティアの皆様には改めてお礼を申し上げたいです。そうした皆さんが、ロンドン大会では GAMES MAKER として誇りをもって活動され、国に関係なく私たちを助け、励まし、賞賛を送って下さいました。試合が近づくにつれ、険しくなっていく私の表情から緊張を察して、「リラックスしなよ〜」「ここに来られるだけで素晴らしいことなんだよ！」と励ましてくれたり、何か不便に感じていないかと気遣い、射撃競技の荷物を率先して手伝ったりしてくれたのが、非常に心強かったです。



その一方で、これから試合という時に「写真を撮って」とお願いされたり、試合会場へのシャ

トルバスが来ず、バス乗り場のボランティアから曖昧な答えがあったりした時は、もっと的確な回答が欲しいと思うこともありました。また、観戦で行った車いすバスケットの会場でボランティアの方が車いす席へ上手く誘導できず、試合のスタートに間に合わないということもありましたので、東京では更に素晴らしいおもてなしが出来ればと思います。

リオパラリンピックには、観客の視点で会場のバリアフリー視察を行い、セキュリティゲートの場所や車いすの通り道や座席の案内などでたくさんのボランティアの方に助けて頂きました。視察で行ったオリンピックパーク周辺のバリアフリーはかなり進んでいましたが、コパカバーナビーチでは整備が十分ではなく、もし選手として単独で車いすで来ていたら、あるいは視覚障害があったとしたら、と考えると少し怖いと感じました。

しかし、リオの皆さんは“ノリ”の良さで全てをカバーしている様に感じました。優先座席のマークでは、肥満の方も優先座席に座れるように太った方を模した可愛らしいマークで面白かったです。車いす用座席は非常に機能的でしたし、特に車いすマークの人物がコーラを飲んでいる所が可愛らしく、2020年の東京大会でも是非こうしたオシャレな事をしてほしいと思いました。耳の聞こえない人の為の電話では、受話器をパソコンのところに置くと相手が話している内容が画面に表示されるようになっていました。電車で行ったコルコバードの丘では急な勾配が多かったのですが、スタッフの方が完璧にフォローしてくれて、心の面、ソフト面でのバリアフリーは十分に進んでいると感じました。東京では、皆さんと一緒に盛り上げていければと思います。

- 佐野：リオパラリンピックには、選手という立場ではなく観客として参加されましたが、過去に経験された大会と比べて、リオのボランティアの特色や違い、あるいは共通点などはありましたか？
- 田口：各国の組織委員会や政策によってそれぞれ違いがあるとは思いますが、アテネの時は私も初めての参加で緊張し過ぎていて覚えていることは少ないのですが、ボランティアのおじさんに大変お世話になったことはよく覚えています。北京の時は、学校が主体となっていたため、学生が非常に多かった印象がありますが、日がたつにつれて、どうしても学生のノリというか、緩んでくる部分がありました。ロンドンは、老若男女皆ホスピタリティ満載で、みんなで盛り上げよう、オリンピック・パラリンピックを成功させようという気持ちで溢れていたと思います。リオの場合は、何か聞いても英語が通じなかったのですが、周りのボランティアの人達が何となくワーッと寄ってきてくれて、それでもみんな言葉が通じず、その場のノリで“オッケー”という感じで、解決したのかしていないのかわからないまま散開し、でもまあいいか、みたいな感じはありました（笑）
- 佐野：やはり文化、お国柄というのがものすごくありますが、それも含め、ボランティアの面白さ・良さ・楽しさなのかな、という気がしました。

竹澤 正剛 氏

(JSVN 講師、Rio2016 オリンピックボランティア)

私にとってスポーツボランティアは趣味で、皆さんがサッカーや他のスポーツを楽しむのと同様に楽しいからやっていて、趣味の延長でリオまで行ってしまいました。ボランティア合格の知らせが来てからも活動場所がなかなか決まらず、会社を2週間休むのも大変でしたが、上司と家族を説得し、自腹で航空券を買い、ホテルを手配しました。



リオに到着した日に、疲れた中でボランティアウェアを受け取りにいきました。ズボン2本、ポロシャツ3枚、靴下3足、靴1足、ウィンドブレーカー1着、雨合羽1着、水のボトル1本、ポーチ1つと身分証を受け取り、活動中はこれらの品以外は身に着けることができず、支給されたポーチに入る範囲でしか持ち込みができませんでした。

担当になったゴルフ競技では、コースマーシャルとして10番ホールでギャラリーの誘導などの活動をしました。その周辺は外国人を含め観客が最も多いため、海外からのボランティアを中心に固められていました。ゴルフ会場は、吹きさらしで雨も降れば風も強く、非常に大変でしたが、楽しくやっていました。チームメイトの出身国はチリ・ブラジル・イギリス・スイス・日本で、当初12名配属されたものの7名しか来ず、途中で他のセクションに引き抜かれた仲間もいました。もちろん英語も使いましたが、結局一番伝わったのはボディランゲージでした。食事に関しては、ゴルフはすべて日中に競技が行われるので、昼食のバウチャー（食券）が配られています。様々なメニューが提供され、味は美味しかったです。

懸念されていた治安ですが、大会全体を通して極めて安全な大会だったと思っています。“ハードはないけどハートはある”というところで、ハートで全部こなしていたのが正直な印象です。施設も仮設のものばかりでしたが、幕を卷けば何とかなるという事がよく分かりました。活動前の研修の際に「“Every language has smile”（＝全ての言語に笑顔はあります）。あなた達は色々な国から来ましたが、みんな笑顔をもっていますよね？それを積極的に使いましょう」と言われた事が印象に残っています。

東京2020大会開催への宿題としては、我々日本人は、多様な人々が来日した時に笑顔で「ようこそ！」と受け入れる事が果たしてできるだろうか、ということです。五輪だから、すごく特別だからという事は一つなく、皆さんの日々のスポーツボランティア活動の中で参加者やチームの方々に心がけている思いやりがあれば、全く問題ないかと思います。

- 佐野：“スマイル”がすべてだということが、お話の中から、また私自身の体験からも感じました。一方で、決していいことばかりでなかったかと思うのですが、その点について少しお話しいただけますでしょうか？

- 竹澤：ここにいらっしゃるスポーツボランティアの皆様も苦を楽しむのが得意な方々かと思しますので、あまり大変な事はなかったのですが、一番困ったのは、大会期間中、地下鉄は毎朝4時から動いていると教えられていたのに、大会期間のど真ん中に運休した事です。会場に7時に着くために4時の始発から乗り継いで行ってもギリギリで、距離にして東京から大磯ぐらいの道のりを毎日通っていたイメージなのですが、タイヤがよく分からず、毎朝始発を狙って行かないと間に合わない状況でした。その日は、朝、駅へ行ってみると地下鉄の入口が閉まっていて、どうやって行こうかと悩んでいると、朝までクラブで踊って飲んでいたと思わしきブラジル人の男性2人組が近寄ってきて「地下鉄は来ないよ」と片言の英語で教えてくれたので、すぐにUberで車を呼んで会場へ向かいました。また女子ゴルフの最終日も、テレビ中継の関係から突然スタートのタイミングが変わり、その日もタクシーで行く事になりました。当然、費用は自己負担となります。

- 佐野：交通アクセスの問題は多いですね。私もいろいろ経験がありますが、1996年のアトランタでは隣の会場に行くのに1時間半かかったこともありました。オリンピックでなぜそういうことが起こるかという、土地の事を全く知らない人がその時だけボランティアで案内や運転をしたりしているからなんですね。

星野 恭子 氏

(JSVN 特別講師、Rio2016 パラリンピック取材)

十数年前に視覚障害者の伴走のボランティアを始めたことがきっかけで、ライターという仕事上の取材対象としても障害者スポーツに興味をもつようになり、今回のリオで5回目のパラリンピック取材となりましたが、海外の知らない土地・会場での取材にはボランティアの皆さんのサポートが必要不可欠だといつも感じています。



ボランティアの姿を通して国が見えるということを過去の大会取材でも実感してきましたが、リオでは“楽しい！ラテンのノリってこんな風なんだな！”と毎日感じていました。ボランティアの数が大会直前に1.5万人に減らされ、これまでと比べても少ない印象でしたが、現地のボランティアの皆さんの陽気で思いやりある人柄でカバーできている部分が多く、障害のある方も含め、いろんな方がボランティア活動をしていました。

私は、全 22 競技のうち 11 競技の取材を行ったのに加えて、大会の運営体制やボランティアの方にも取材を行いました。その中で特に印象に残っているのは、現地のボランティアの皆さんが、言葉が通じずとも何とか役に立とうとカラダ全体や周辺の物を使って伝えようとする姿勢です。車いす用のスロープなど仮設の施設が多くありましたが、それでも十分に役立っていましたし、段差などで困っているとボランティアの方がすぐに寄ってきて下さり、「バリアは確かにあったけれども、たくさんの方が助けてくださったので問題なかった」という声が選手の皆さんからも多く聞かれ、“ハードの不備はハートで補える”という事を強く感じました。

観客の応援も非常に盛り上がり、中でも特に目立ったのは子供たちの応援です。子供たちは、“すごいことはすごい・楽しいことは楽しい”と目の前で起きていることに素直に反応するので、そうした子供たちの純粋な反応が、大人たちの意識にも大きく影響を与える、所謂“リバーエデュケーション”の効果があると言われていています。組織委員会がリオデジャネイロ州政府と連携して 3.3 万枚を周辺の学校にチケットを無料で配布し、人が集まりづらい平日の昼間の時間帯にも子供たちの姿が多くみられた他、組織委員会と IPC の連携で行われた“Fill the seat”というキャンペーンでは、世界から 44 万米ドルの寄付が集まり、約 1.5 万人の子供たちがパラリンピックを観戦したということです。子供への教育的な意味だけでなく、子供が席を埋めることで盛り上がりを見せ、週末には子供が家族を連れて席を埋めるという効果も生まれます。東京でもこうした取り組みがあることを期待しています。

- 佐野： ボランティアをやるにあたって必要な知識という点についてはいかがでしょうか？

- 星野： 特にパラリンピックに関して言うと、選手にも観客の方にも障害がある方が多く、そうした方達とどう接していいか分からないという声をよく聞きます。私自身も最初は戸惑いがありましたが、実際に接してみると、話をすれば心は通じ合います。特別に構える必要は全くなく、ただ、ポイントとなる知識があれば、自信をもって一步踏み出しやすくなると思います。街中で障害のある方が困っている時に、相手が声を掛けられて助かる言葉があります。例えば「大丈夫ですか？」と聞いてしまうと「大丈夫じゃないです！」とは答えづらいので、「何かお手伝いしましょうか？」と問いかければ、「お願いします」と相手が答えやすくなります。こうした言葉を切り札として持っておくと、コミュニケーションをとる際に役に立つかと思います。

②ディスカッション

- 佐野： 国際大会ではなかなかコミュニケーションをとるのが難しいかと思いますが、ご意見をお聞かせください。

- 田口： 選手・ボランティアによって英語が話せる人・話せない人もいれば、様々な国の言

葉があるので、確かに難しいとは思いますが。選手は、ボディランゲージ等で自分の望むことを伝えるという経験があるかと思いますが、そこを我々がどう汲み取るかというのが課題になります。また障害者の方は、身体上の理由から自分では出来ない身の回りをお願いする場合があります。日本人の方は親切心から「これをやってあげるね」と助けてくれる事が多いのですが、基本的に自分でやれる事は自分で行います。お気持ちは嬉しいのですが、「何かお手伝いできることはありますか？」と一声かけて頂ければ、私の場合は必要な時にお願いもすることもあれば、自分で出来ることに関しては「いまは大丈夫です」とお断りする事もあります。「大丈夫です」「いいです」という返答は拒否した訳ではなく、自分で出来るから大丈夫という意味です。障害は人それぞれで、私の場合は手が使えるので自分の手で出来ることは大丈夫ですが、例えば頸椎損傷の選手で握力が十分ではない方からは「車いすを押していただけますか」とお願いされることもあるかと思いますが。まずは心と心が通じ合うような会話ができるといいと思います。

- 佐野：（障害のある方とは）逆の立場でボランティアをされていて、竹澤さんはどのようにお考えでしょうか？
- 竹澤： リオのボランティアでも障害者の方への声の接遇についてオンライン研修があり、障害者の方も当然のことながら私たちと同じ人間ですので、必ず対等に接しなさいという事はしっかりと学んだ記憶があります。例えば、「段差を前にした車いすの方にどのようにお声がけをしますか？」という事例など、ボランティアとして基礎的な部分はこういった研修で身に着けられるかと思いますが。ただ、やはりボランティアにも語学力は必要だと思います。片言でもいいので、自分が何を出来るのか、何がしたいのかを相手に伝えなければなりません。日本人同士であれば、なんとなく「この流れだとこれをしてほしいんだろうな」という事がある程度わかりますが、相手もこちらも英語が得意でない場合には、お互いに何を求めているのかを明確にするようなコミュニケーション、すなわち“する・したい・できる”を明確に伝えることが重要です。
- 佐野： そのためにも、ボディランゲージだけでなく、語学は大変重要ということですね。星野さん、いかがでしょうか？
- 星野： やはり言葉が通じると安心ではあると思います。私は5大会の取材経験がありますが、特にソチではロシア語しか話せないボランティアが多く、たくさんの方が行き交う町中のインフォメーションセンターですら、英語は一切なくロシア語だけでした。バスの時間を聞くと、スタッフがタブレットを取り出し、英露翻訳のアプリでコミュニケーションをとることができました。2020年にはボランティアの皆さんがこうしたIT機器を持っていれば、会話もしやすいですし、言葉ではなくても絵文字のようなものを指さすだけでコミュニケーションがとれて安心ではないかと思いました。
- 田口： 選手の時は、時間や金額など、大事な数字を聞くときは必ず紙に書いて確認していました。「あなたが言っているのは15:50ですよ？」と紙に書いて、「これこれ！」とか「ちがう！」というようなやりとりをボランティアの方も出来るといいかと思います。

- 佐野： 先程の翻訳機などのツールは、様々な会社が開発していますね。ただ、それが上手く入手できればいいのですが、なかなか簡単ではないかもしれません。竹澤さん、なにか今すぐにはできないことはないでしょうか？
- 竹澤： 実際、リオの街中でもありましたが、困っていたら「大丈夫か？」と皆さん集まって来てくださるんですね、ポルトガル語でしたが。例えば、地下鉄の優先座席で、ブラジルの方々はどんなに混雑していても、お子さん連れの方や年配の方、足が悪そうな方などには必ず席を譲りますし、周りの方も「席を空けてあげてよ！」と声をかけていました。果たして日本人はそういうことができるのでしょうか？ 駅で路線図を広げて悩んでいる人に声をかけられるのでしょうか？一言でも案内してあげるだけで、彼らにとってこの国の印象は変わります。4年後に向けて日々こうしたことを積み上げていくことが大切ではないかと思います。

③会場からの質問

<会場から質問①> 世界の障害者事情に比べて日本が劣っている点はありますか？

- 田口： 今まで私が行った国と比べると、日本はハード面で劣っているとはいませんが、まだまだ整っていない部分はたくさんあるかと思います。ヨーロッパや、特にアメリカなどは、国土面積の差もあり一概には比べられませんが、例えば日本の喫茶店では、トイレが一つしかない場合に車いすの方が使えることはまずないのですが、アメリカの場合は、必ず車いすごと入って使用できます。それはベトナム戦争の負傷者への配慮もあってか、法律によって整備されています。私がアメリカに少し住んでいた頃、お店に行く時に「あそのトイレ大丈夫かな？入れるかな？」と心配したことは一度もなく、何も考えることなく「あそのお店に入ろう」と普通に行くことができ、断られることもなく入ることができました。

ところが、日本ではなかなかそうした情報が無いので、事前にお店に問い合わせないと分からず、問い合わせしてみると「段差が3段ありまして…」という場合が多いです。逆に、海外のトイレでは、車いすで入れるものの、手すりが遠くにあるようなトイレがあったりするのに比べて、日本の場合、障害者対応のトイレがある場合には手すりやウォシュレットのボタンが左右にあることなど、機能が非常に行き届いていたりします。日本人はあらゆるケースを想定し、そのシチュエーションに応じて細かく対応する能力はあると思います。

ただ、一番劣っているかもしれない点は、そうした障害者用のトイレを日本人は健常者が平気で使ってしまうところで、海外では有り得ないことです。先日、IOCのアクセシビリティ担当で車いすに乗っている方が東京に視察に来られていて、障害者用トイレの前で一緒に待っていたのですが、15分ほどしてようやく出てきたのはiPadを持ったスーツ姿の男性で、そういうことがその日2回もありました。IOCの方に「こうしたことは他の国でもありますか？」と聞いてみると、「Typical Japanese (=日本独特)」だと言われてしまいました。

もしかすると、日本ではまだまだ障害者が外に出てきておらず、“空いている”というイメージが多いからかもしれませんが、“障害者”という言葉を使わない配慮から命名された“多目

的トイレ”や“誰でもトイレ”という呼称によってグレーになっている部分があり、わざわざ中に着替え用の台がついていたりするので、健常者の方が着替えている事が多々あります。そんなところを海外の方が見たら「これが“おもてなし”と言っていたあの国なのか？」と思うかもしれませんし、こうしたところが一番劣っている部分だと思います。

- 佐野： 確か新幹線では車いす席は1編成に2座席しかなく、あとは多目的室が空いていたら使えるくらいで、しかも予約の方法が複雑なんですよ？
- 田口： 電話でしか予約ができず、車いす席は当日の3日前には一般席として開放されてしまいます。しかも電話予約ができるのが18時～19時くらいまでなんです。
- 佐野： そういった事も含めて、まだまだやらなければいけないことはたくさんあると思います。やれ“インバウンドだ”と言っていますが、新幹線の通路に電動車いすは入れませんし、こんな状態では本当のインバウンドは夢のまた夢ですね。これが今の日本の現状だということですよ。

<会場から質問②> 競技の知識はボランティアにどの程度必要ですか？

- 竹澤： 例えば、この中で近代五種をすべて言える方はいらっしゃいますか？実際、ブラジルではゴルフはポピュラーではなかったもので、一緒に活動したブラジル人ボランティアの半分はゴルフという競技を知りませんでした。競技の成り立ちやルールなど基礎的なオンライン研修は事前にあります。あとは実地で本番前に入って練習しているプレーヤーの動きを見て学ぶという形でした。応募の際、担当会場の希望は聞かれましたが、特別な知識があるかどうかは問われませんでした。もし担当が近代五種になっていたら、一から勉強するしかなかったと思いますが、やはり、その競技についての事前学習をして、ボランティアも対応にあたるべきかと思います。

④ まとめ

- 田口： パラリンピックという言葉が聞かれるようになったものの、種目や競技・ルールを御存知ない方も多いかと思います。今後、日本でもワールドカップや国際大会が開催され、国内大会でもたくさんあるので、是非観戦して選手の名前を憶えたり、障害のクラス分け等のルールを覚えたり、とにかくまずは楽しんで観る事から始めて頂ければと思います。ボランティアの皆さんと一緒に関わって“チームジャパン”を形作るのだと思っていますので、今日ご来場の皆様がボランティアとして参加したり、会場に行って盛り上げていただければと思います。
- 竹澤： 普段からスポーツボランティアをされている方にとって、オリンピック・パラリンピックはその延長であるだけの話で、違うのは、英語を使うというだけですね。中学3年までの教科書をやれば英語を話せるようになると言われていますし、まだスポーツボランティアに参加した事がない方は、まずは地域の小さなスポーツイベントに参加して頂いて“する・

みる”だけではなく“支える”スポーツの楽しさを体感して頂ければ、それが先々に繋がっていくと思います。

- 星野： リオ大会では、とにかく楽しんでいるボランティアの姿が周りの人々に感染していて、見ている観客や取材陣の私達も自然に笑顔になるような、そんな雰囲気が広がっていました。パラリンピックに関しては、まずは競技に触れる事がボランティアの第一歩であり、ご自身が大会・競技・ボランティアを楽しむという心構えが大事なのかなと思います。パラリンピックに興味を持って頂ける方がいらっしゃいましたら、まず第一歩として会場に観戦しに行ってみていただければ競技の楽しさも分かりますし、必要とされる事も分かるのではないかなと思います。
- 佐野： 私から一つだけ申し上げるとすれば、大会を成功させるのは、地元選手の活躍、観客の応援、そしてボランティアの活躍です。ボランティアの皆様の活動が、大会の印象として一番深く刻み込まれます。そんな大会の顔として活躍するためにも、競技を見ることから始め、知って・楽しんで・応援し、支える立場へと進化して行って頂ければと思います。これからは少子化が進み、共生社会を作らなければいけないと言われてはいますが、それを一番に実現してくれるのがボランティアの皆様だと思っております。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

(4) 大会概要紹介

陸川 克己氏

(公益財団法人ラグビーワールドカップ 2019
組織委員会 総務・人事部長)

東京オリンピック・パラリンピックの1年前に、ラグビーワールドカップ 2019 が日本全国で開催されます。私は、組織委員会の総務・人事部長として、組織や人事に関することや、大会ボランティアに関することを担当しています。ラグビーワールドカップの日本開催が決まったのは2009年で、準備組織を経て2013年に公益財団法人ラグビーワールドカップ2019組織委員会ができました。2015年3月に開催地が札幌から大分まで、全国12会場に決まった後、本格的に事務局が稼働しました。当初11人でしたが、現在は82人の体制で大会準備を進めております。

ラグビーワールドカップでは、38の業務領域にわかれてそれぞれ準備をしています。ちなみに、オリンピックは41業務です。大会の規模としては、オリンピックは桁外れですが、その次がサッカーのワールドカップ、そしてサッカーに次ぐ規模であるのがラグビーワールドカップです。ラグビーは競技として普及している地域が偏っているため、そういったイメージは薄いかもしれま



せんが、世界3大スポーツ大会の一つとなっています。

ラグビーワールドカップは、1987年に始まり、日本大会で9回目になります。サッカーが20回ですので比較的歴史が浅いともいえます。実はラグビーの歴史そのものは古く、北半球と南半球に分かれ、大きな歴史ある大会がそれぞれ実施されてはいましたが、世界一を決める大会としてはありませんでした。そこで幾多の議論を経てIRB（現WR）の創立100周年を記念して、ワールドカップが開催されることとなった経緯があります。

私もイングランド大会を実際に観戦しましたが、特徴的なこととしてはラグビーの観客席は、敵味方入り乱れて観戦し、相手のチームのファンとも挨拶を交わし交流がはかられており、ラグビーを通じた社交の場、国際交流の場といった印象を受けました。

日本大会では、40万人以上の方が来日されると予想されていますが、ラグビーワールドカップには、富裕層の人たちが多く、長く滞在するといった特徴があります。過去大会でみると平均的な滞在期間は約3週間で、1から2試合を競技場で観戦する以外は観光をするなど、比較的ゆったりとした滞在をされるという特徴があります。

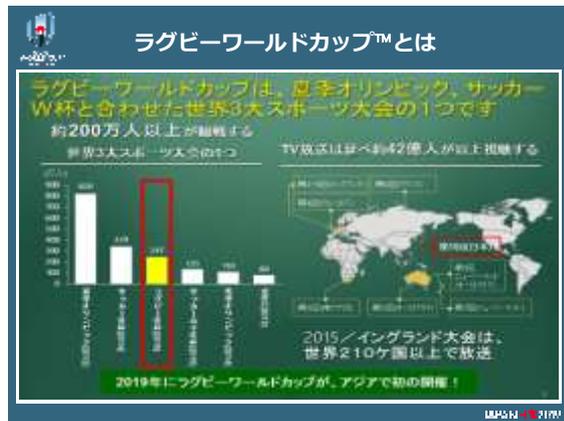
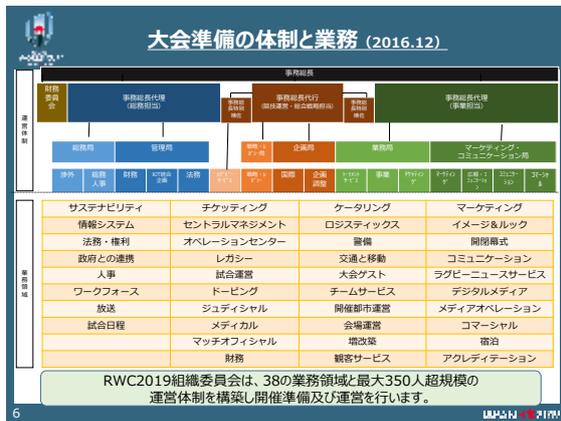
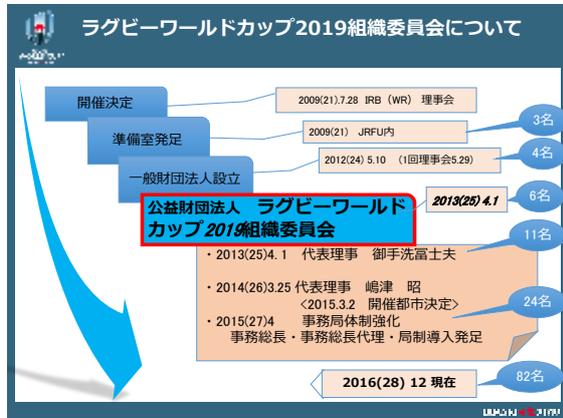
イングランド大会では、皆様ご承知のとおり日本代表チームが大躍進を遂げたということで、日本のラグビーが世界的にも評価され、その後のテストマッチなどでもラグビー日本チームは世界のラグビーファンから敬意をもって見られています。そういったこともあり、今、ラグビーを通して、日本大会への関心や期待が上がっている状況です。

大会は、2019年9月20日から11月2日まで開催されます。今回のワールドカップの特徴は、アジアで初、ラグビー伝統国以外で初、また、7人制ラグビーがオリンピック実施後、初めてのワールドカップでもあります。開催会場は、北海道から大分まで12会場となっており、様々な経済効果や地域の活性化の効果が期待されます。数値的には様々なものがありますが、世界的な大会を実施することや参加していただくことで地域が自信と誇りを持ってもらうということが一番ではないかと考えております。

2017年の5月にプール分け抽選会があり、2017年の秋に試合日程が決まります。そのころにボランティアの募集要項が決まる予定で、今のところ、6,000人を想定していますが、ラグビーファミリーはもちろん地域の方々など、より多くの方々に参加してもらいたいと考えていますので、おそらく1万人を超える規模のボランティアを募集することになるのではないかと考えています。ただ、そうなった時に我々が考えなくてはいけないことは、参加される方々の経験の問題です。研修などでの工夫はしていきたいと思いますが、そこには限界があります。チームリーダーになれるような活動経験豊富な方々にできるだけ多く参加していただくことが必要と考えています。

観客と直接触れ合う機会があり、大会そのものの雰囲気を作るのがボランティアの皆さんです。

我々事務局は裏方であり、やはり観客やテレビを通じて伝わるのはボランティアの皆さんの雰囲気です。そういった意味からも様々な活動経験をもった皆さんの積極的な参加をお願いいたします。



ラグビーワールドカップ™の開催経過

開催回	開催年	開催国	開催地	出場国数	参加人数	チケット総数	TV放送国数	TV視聴者数
第1回	1987年	ニュージーランド・オーストラリア	ニュージーランド	16	16	60万枚	17	2.3億人
第2回	1991年	イングランド	オーストラリア	16	33	100万枚	103	14億人
第3回	1995年	南アフリカ	南アフリカ	16	53	110万枚	124	23億人
第4回	1999年	ウェールズ	オーストラリア	20	65	170万枚	209	31億人
第5回	2003年	オーストラリア	イングランド	20	89	180万枚	193	34億人
第6回	2007年	フランス	南アフリカ	20	94	225万枚	200	43億人
第7回	2011年	ニュージーランド	ニュージーランド	20	91	135万枚	207	39億人
第8回	2015年	イングランド	ニュージーランド	20	96	247万枚	210	43億人
第9回	2019年	日本		20	?	?	?	?

ラグビーワールドカップ™の開催経過

1987年まで「世界一」を決める大会は存在せず。

- 北半球 (1882~)
 - 五ヶ国対抗 (イングランド、スコットランド、アイルランド、ウェールズ、フランス)
- 南半球 (1931~)
 - フレディローカップ (オーストラリア、ニュージーランド)
 - ※ 南北交流1891~ 4年に1回
- ニュージーランドとオーストラリアが提案。
 - ⇒IRB創立100周年 (1986年) を記念して、1987年から、ラグビーワールドラグビーの開催を決定。
 - (スコットランドとアイルランドは反対)

第1回大会開催 [1987.5.22~6.20]
ニュージーランドとオーストラリアの共催

ラグビーワールドカップ2019™概要

開催期間	2019年9月20日(金)～11月2日(土)
試合数	48試合 (予選プール40試合・決勝トーナメント8試合)
試合会場	日本全国12会場
開幕戦/決勝戦	開会式・開幕戦 「東京スタジアム」 決勝戦 「横浜国際総合競技場」
特長	<ol style="list-style-type: none"> アジアで初の開催 ラグビー-伝統国以外で初 ラグビー(7人制)がオリンピック実施後、初

試合開催会場について

ラグビーワールドカップ2019™のもたらす効果

■ RWC2019 日本大会

確定事項	1 事業分野・領域	スポーツ分野/スポーツイベント運営事業
	2 期間	2019年9月20日～11月2日 (7週間)
	3 参加チーム	20チーム
	4 試合会場	全国12会場 (北海道～大分)
	5 大会の特長	<ol style="list-style-type: none"> アジア初のラグビーワールドカップ™ ラグビー-伝統国以外で初のラグビーワールドカップ™ ラグビー(7人制)がオリンピック種目に採用されてから初の大会
見込み(※1)	6 経済波及効果	4,200億円
	7 海外来訪者	40万人

■ RWC2015 イングランド大会

実績(※2)	8 観客総動員数	247万人
	9 決勝テレビ視聴者数	1億2,000万人
	10 採用人員	正規スタッフ(含む一部業務委託)約400名、ボランティア約6,000名

※参照元 (※1)RWC2019日本大会開催による経済効果(EY総合研究所)
(※2)WR フレズリクスより

開催都市(日本)にもたらすもの

地域のつながり・地域の自信・地域の誇り(人の)

ラグビーワールドカップ2019™に向けたロードマップ

ラグビーワールドカップ2019™ 日本大会 プール組分け抽選会 概要

- 2017年5月10日(水) 京都迎賓館にて開催予定
- 主催: Rugby World Cup Limited /World Rugby
- 抽選: 抽選会当日の世界ランキングをもとに、参加(出場) 20チームをプールA～Dに振り分ける ※本大会は各プール組分けで上位2チームが決勝トーナメント進出
- 出場決定..12チーム
ニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ、ウェールズ、アルゼンチン、イングランド、フランス、アイルランド、スコットランド、日本、ジョージア、イタリア
- 現在予選中..8チーム
- プレゼンター: 5名 ※前回PAD実績
- 招待者: 世界各国より約200名(予定)+報道・メディア関係者多数
- 全世界へテレビ、ラジオ、インターネットにて生中継(予定)

ボランティアプログラムの方向性について

■ イングランド大会 2015

参加人数	6,149人	うち4,500人(75%) ⇒イングランド協会・ウェールズ協会のクラブチーム関係者等のラグビーファミリー
------	--------	--

■ 主な役割
マッチオフィシャル補助、ドーピング補助、医療補助、TEC・メディア運営、会場運営、スポーツレゼンテーション、チケットティング、大会ゲスト対応、スタッフ管理、案内、交通整理、各種案内、運営手、会場内売店補助、問答等 など あらゆる業務で活用

■ 日本大会 2019

- スポーツボランティア: スポーツを『する』『観る』という従来の楽しみ方に加え、スポーツを『支える』という新たなスポーツへの参加形態。その定着は、スポーツ立国の実現に向けたスポーツ基本法(平23制定)の重要な基礎のひとつとなる。

■ RWC2019大会ボランティアプログラムの考え方

- 新たなラグビーファンの獲得やラグビーの国民への定着、浸透は大会の最も重要なタスクの一つ
- ボランティアは、国民がラグビーワールドカップに直接的に参加できる唯一の手段
- 開催都市においては地域住民の参加と協働は、地域での大会の盛り上げや地方創生のために必要不可欠

観客に最も身近で重要なスタッフ (スポーツ)の担い手

■ 大会予算上は、6,000人程度 (ER2015と同人数規模)の大会ボランティア採用を想定するが、開催都市と連携し、ラグビーファミリーはもちろむ、各開催都市の住民を中心に多くの参加を募る

■ 開催自治体・東京2020との連携の下、募集や面接、研修等において相互に連携し、重複を避けるとともに、お互いのノウハウを共有しながら進める

■ 募集開始時期は、過去大会の状況や東京2020の募集スケジュール(予定)等を考慮し、2018年3月を想定し準備を進める。

3年前プロモーションイベントについて

■ 概要:

- 本年9/20～11/2を3年前PRイベント期間 (3 years to go) と定め、日本協会、開催都市と連携しながら様々な情報を発信
- ラグビーワールドカップ2019日本大会公式サポーターズクラブを9/20に開設し、3年前PRイベントでの情報発信を通じて会員獲得の促進を図る
- 大会公式サポーターズクラブURL: rugbyworldcup.com/supporters

■ 主な施策:

- 全12開催都市での首長表敬訪問 (10/3 東京都小池知事訪問)
- 日本代表選手を交えたトークショー (9/20 東京)
- 各開催都市からのSNS発信

(5) 総括(要旨)

二宮 雅也

(日本スポーツボランティアネットワーク 理事)



長時間にわたりご参加いただきありがとうございます。本日は、多くの学びがあったのではないのでしょうか。総括として感じたことを幾つか述べさせていただきます。

基調講演の朝日健太郎様からは、意外にも幼少期は運動が苦手な部分もあり、ご自身がスポーツを継続していくために自発的に環境を創造し続けていらっしゃったことが印象に残りました。スポーツボランティアの活動も同様で、継続率の高い人は自分で状況判断をしながら活動を創造していることから、その大切さを再認識いたしました。

パネルディスカッションでは、3名の登壇者からリオのオリンピック・パラリンピックでは、ボランティアの「スマイル！笑顔！」が大変印象に残ったとご報告いただきました。日本人は、真面目に作業すると集中して笑顔を忘れる傾向がありますので、日頃の生活から意識して笑顔でいられるように心がける必要があると感じました。また、今回のリオでは、突然リーダーとして活動することになるなど、マニュアルに無いことが起こったようですが、ボランティアとしては、実はマニュアルに無いことをやっている時は意外と楽しく、思い出にも残るもので、ボランティアの醍醐味でもあります。リオでのお話を聞いていて、2020 東京大会でも、ボランティアが状況判断をしながら創造していける大会になれば良いなと感じました。また、途中「共生社会」という言葉も出てきましたけれど、他の分野ではなかなか作れないため、まずはスポーツで共生社会のモデリングをつくってみてはと考えています。2020 年東京大会は共生社会の縮図のような活動ですので、共生社会のモデルを築くことが可能なのではないかと期待しています。

ラグビーワールドカップ 2019 の組織委員会からもご報告いただきましたが、私はラグビーへの期待が2つあります。1つは、スーパーラグビーという日本代表試合の会場で、一般ボランティアの募集が検討されていることです。2つ目に、震災復興としての釜石市のラグビーの取組みがあります。2019 年大会の開催地のひとつである釜石市の地元の人々が、どれだけボランティアとして参加してくださるかが、実は震災復興のひとつのバロメーターになると考え期待しています。

最後に、私の現在の仕事としての関わりとして、2020 東京大会組織委員会のボランティアのアドバイザー会議の委員をしており、2016 年 12 月 15 日に「東京 2020 大会に向けたボランティア戦略」を発表いたしました。特に私が強調しているのは、現在介護中・子育て中、また障害のある方など、誰でも活動したいと思う方が、活動可能なボランティア活動にしてもらいたいとリクエストをしてきました。海外や遠方から活動に来る方は、宿泊費も大変になってくるので「ボランティア村」を設置するなどして、ボランティアが滞在し、交流を図れるような場所を設ける

ことも意見として出しているところです。

2020年東京大会に向けて、まだまだ課題はありますが、スポーツボランティア活動は「楽しい活動」ですので、スポーツのひとつの関わり方として、一人ひとりが今後実践していただきたいと思います。本日は長時間にわたり、ご参加いただきありがとうございました。

以上

** 編集協力 **

編集担当：出樋 直子（事務局運営ボランティア）

執筆担当：及川 登代子（広報ボランティア）

堀江 信之介（広報ボランティア）

スポーツボランティアサミット 2016 報告書

特定非営利活動法人日本スポーツボランティアネットワーク

〒107-6011

東京都港区赤坂 1-12-32 アーク森ビル 11 階公益財団法人笹川スポーツ財団内

電話：03-5545-3301 FAX：03-5545-3305

<http://www.jsvn.or.jp/> E-mail: info@jsvn.or.jp
